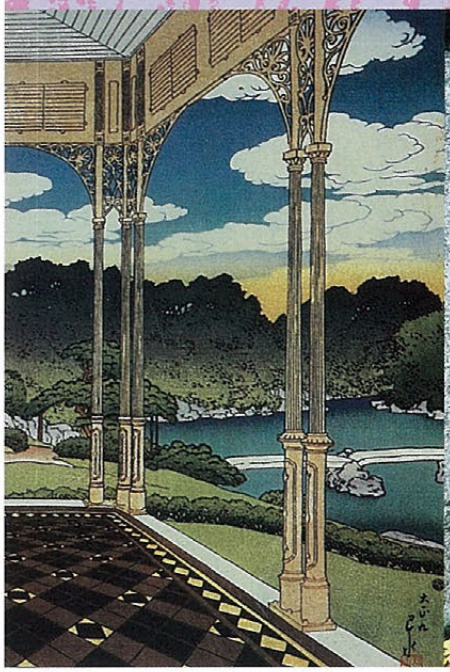
下町文化

第 203 号
平成11年2月15日
発 行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

特集 江東ゆかりの人物



三菱深川別邸の図（『川瀬巴水木版画集』）

森陳明墓碑

江東区の歴史を彩る人物 ここに一挙掲載!!

本紙既報のとおり去る10月20日、掲載中の「江東ゆかりの人物」を執筆いただいた辻康信先生が亡くなられました。先生は東陽小学校校長をご退職後、文化財係をはじめ各文化センターなどで江東区の歴史に関する講師を勤められました。とくに人物史に関しては造詣が深く、先生のユーモラスな話術には、ファンの方も多かったと思います。本号では、これまで先生からお寄せいただいた原稿のうち、未掲載分を一挙に取り上げます。先生の名調子を偲びながら、辻ワールドをお楽しみください。

コンドル

現存する駿河台のニコライ堂、港区三田の三井倶楽部、北区西ヶ原の古河邸、品川の開東閣、今はなき日比谷の鹿鳴館などは、明治初期、日本建築の近代化に尽くしたこの人の設計建造による。

岩崎弥之助の三菱深川別邸（現清澄庭園）に、この人の設計により二階建、西洋館が完成した。明治19年着工。22年竣工である。13年前に鹿鳴館を竣工させたばかりである。池を配したルネスサン様式の深川別邸は三菱の商圏拡大のため政府要人、諸外国人などの接待に大いに活用された。その後、彼は三菱の顧問に就任、三菱関係の仕事を全面的に引き受け、丸ノ内東京駅周辺の一丁目ロンドンなど手がけていく。

が、清澄庭園深川別邸の西洋建築は、関東大震災によって失われた。同時にコンドルの名も深川から消えてしまった。

ショサイア・コンドル、明治10年日本の建築近代化のために「お雇い外国人」として英国から来日したのは24才の時。英国でも新進建築家として将来を期待されていた。内閣工部省技術官として明治の東京に彼の設計の建築がいたるところにみられていく。

また、日本銀行本店本館・東京駅などの設計辰野金吾、赤坂離宮・帝

国京都博物館などの片山東熊、丸ノ内赤煉瓦街などの建設曽祢達蔵などの日本の近代建築界をリードしてきた巨匠たちを育てた。

幕末から明治中期に活躍した画家河鍋暁斎に師事し、画号暁英を授けられ日本画作品展を開いたり、歌舞伎を愛し、落語にのめりこみ、日本舞踊を習ったりの風変わりな外国人だった。

日本女性と結婚し、大正9年麻布で没。67才。豊島区護国寺に葬らる。

東京大学内に名誉教授としての彼の英姿は銅像として残る。

森陳明

白河1丁目霊巌寺に「旧桑名藩主松平家歴代之墓」に沿って桑名藩士『森陳明之墓』（墓碑）がある。詣でる人もなく、また、区の記録にも余りふれられていない（昭和58年　区登録文化財）。幕末維新動乱、深川入舟町（現牡丹3丁目）にあった桑名藩抱屋敷で切腹、桑名藩を救った武士である。

幕末の桑名藩（三重県）は藩主定敬を中心に慶応4年から翌明治2年の約1年5ヵ月の間、鳥羽伏見に、柏崎に、会津に、仙台に、そして函館五稜郭にと、官軍と徹底的抗戦を展開した。そして、敗れた。

明治政府によって桑名藩士20名は桑名藩仮屋敷として使用されていた深川霊巌寺に収容された。桑名藩戦争責任者追求の命令が霊巌寺に伝えられた。「拙者がその責任者だ」と名のりをあげたのが、この森陳明であった。桑名藩11万石の存続を願っての名のりであった。

森陳明は霊巌寺から深川入舟町桑名藩抱屋敷に檻送され、切腹を命じられた。

藩主定敬が京都所司代となると公用人として奔走、彰義隊に加って上野に戦い、そして函館へと歴戦の様子が走馬灯のように頭をかけめぐったであろう。

「うれしさよ、尽すまことのあらはれて、君にかはれる死出の旅立」

「なかなかに惜しき命にありながら君のために何いとうべき」

の辞世を残し、介錯人木村金次郎により斬に処される。時に明治2年11月13日、44才であった。

彼の墓碑は当初明治14年霊巌寺長専院に建立されたが、のち霊巌寺の藩主松平氏墓の側に移された。桑名市伝馬町の十念寺にも彼の墓はあり、市の重要文化財に指定されている。戦前までは墓前祭などが催しされていたが今は行れていないという。

元杢網夫妻

江戸中期、天明時代の狂歌の大家杢網、その妻智恵内子が深川2丁目正覚寺に永遠のねむりについている。

本名金子正雄、通称大野屋喜三郎。現中央区八重洲6丁目辺に風呂屋を経営。国学の素養深く、作品平淡、わかり易いと名声を馳せ、江戸町人の半分は彼の門人であったという。

妻は本名すめ（一説にはみち、川越の産という）は、夫と共に狂歌に長じていた。

芝神谷町に住み、晩年は現墨田区堤通り、当時水神の森に居を移した。今も隅田川神社に彼が剃髪したことを記念として、文化3（1806）年建立の碑が残る。その5年後、彼は88才で没した。

夫婦の墓は埼玉県嵐山町杉山にもある。彼の生誕の地である。県指定旧跡の立派な墓だ。

彼は絵を観崇月に学び崇松と称した。崇月墓は深川2—16陽岳寺にある。

師弟の関係で正覚寺にも杢網は供養されたのであろう。

徳川　美賀子（みかこ）

この人、15代将軍徳川慶喜の正室である。明治4年発行吉田屋文三郎版地図の清澄庭園に「徳川新三位中将」の名がある。大政奉還後の慶喜の別称である。だが、慶喜がこの地に居住した事実はない。慶喜の名のもとに居住したのは誰か。それが、徳川美賀子である。

大政奉還、江戸城明け渡し後、美賀子は一橋家所有の屋敷（現文京区千石）から、当時の深川伊勢崎町旧老中関宿城主久世大和守下屋敷（現清澄庭園）にこもった。

当時、慶喜は静岡市常盤町宝台院で謹慎中。さらに、そこから北東250M先の紺屋町に移転し、明治2年11月3日、東京に残した美賀子を呼びよせ、夫妻は一つ家屋の下で生活をすることになる。短い期間ではあったが、美賀子は深川で生活をしたことになる。が、没後二人にまつわる怪談話が徳川家に伝わるのだが―。

清澄庭園には明治4年に至るまで、新三位中将の名が残る。

のち、この地は四条隆謌（たかうた）（幕末七卿落ちの公卿の一員、四条流庖丁司家）家となる。美賀子の親族筋にあたる方である。

さて、美賀子である。

明治24年乳ガンで静岡の慶喜邸で手術後、東京千駄谷の徳川家達（いえさと）（現東京都体育館一帯）邸で病没。明治29年のこと。

記録によると慶喜家に奇怪な話が、この後にささやかれる。

嘉永4～5年ごろ、一条左大臣忠香の娘照姫（千代姫・輝姫とも呼ばれていた）と慶喜との間に婚約成立。それが某日、姫が天然痘にかかる。姫の夢は消えた。一条家では一族菊亭家の美賀子を養女に迎え、慶喜に輿入れさせた。これを耳にした姫は「美賀子が一橋家におさまっても、世つぎは生ませぬ」とさけび自害。それがためか美賀子が生んだ4人の子女は育たなかった。姫の幽霊話もあると、侍女奉公の某女が語っている。

「論文の書き方」講習会

「江東ふるさと歴史研究」論文募集にあわせて、論文の書き方講習会を3月8日（水）に開催します。詳しくは、区報2月11日号をご覧ください。問い合わせは文化財係まで。

芭蕉記念館から

ジュニア俳句教室

日時　3月13日（土）午前9時30分より11時30分（集合9時20分）
会場　2階研修室
内容　俳句をつくってみよう
対象　区内在住の小学生30人（先着順）
費用　無料（筆記用具持参）

芭蕉記念館俳句会

日時　3月16日（火）午後1時30分（集合1時20分）
会場　2階研修室
内容　春季雑詠3句、席題なし
対象　区内在住・在勤の方50人
費用　無料。句報の送付をご希望の方は80円切手貼付宛先明記の封筒をお持ちください。

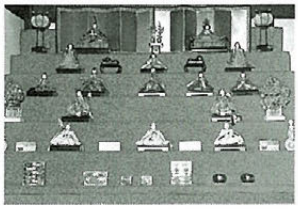
＊ともに先着順、締切は開催日の前日、申込は窓口または電話で

◇芭蕉記念館　☎（3631）1448

旧大石家住宅から

旧大石家の雛飾り

旧大石家住宅では、3月3日の桃の節句にあわせて雛人形を飾ります。飾る人形はいずれも区民の方から寄贈されたものです。展示期間は次の通りです。ご覧になりたい方は期間内の土・日・祝日の午前10時から午後4時までにおいでください。



期日　2月20日（土）から3月7日（日）まで
入場　無料
問合　生涯学習課文化財係

工匠館（たくみのやかた）から

伝統の技　実演公開

毎月第一・第三日曜日に工匠壱番館（森下文化センター内）で行っています職人さんの今後の実演日程は次のとおりです。

2月21日　紋章上絵　石合　信也
3月7日　木　彫　岸本　忠雄
＊時間はいずれも午後1時～3時

第17回時雨忌大会記念講演会

俳聖芭蕉像の形成

早稲田大学教授　堀切　実先生

本日は、昨年（平成9年）3月にニューヨークのコロンビア大学で、日本文学の古典の国際シンポジウムで話した内容を詳しくお話したいと思います。

Ⅰはじめに

芭蕉の代表的な名句〈古池や〉の句は、深川の芭蕉庵で詠まれました。春の昼下がり冬眠から目覚めた蛙が、微かな音をたてて池に飛び込んだ音を、芭蕉が静かに聞いている、春ののどかな季節感とゆったりとした時の流れを詠んだ句とされています。作者の主観を表に出さないで、蛙の音の世界（サウンドスケープ）を表現している優れた句だと思います。

元来、伝統的な和歌の世界では、蛙は鳴く声を詠みますが、ここでは古池に飛び込んだ音を詠んだところに新しさがあります。弟子の土芳や支考、惟然はこの句を"聖典"として、全国に蕉風俳諧を広めていき、連綿と明治の春秋庵幹雄の「古池教会」まで続いていきます。

句の解釈は一、幽玄・さびの句　二、禅問答のように、仏教的な解脱の句　三、近世の写生に通じる描写（ただ事）の句で、しかも余情のある句　四、ありのままを詠んだだけの句等多くの解釈があります。このように次々と時代によって、解釈の違いや読み替えがなされることを作品の古典化、聖典化（カノンフォーメーション）と言います。

Ⅱ芭蕉の誕生

芭蕉は1672年頃に江戸に出てきます。この元禄時代は、出版文化や寺小屋が急速に発達し庶民のなかに文化的条件がそろった時代です。日常の生活を詠んだ俳諧や、伝統的な和歌の世界を継承しつつ革新的な俳諧を模索する芭蕉は、町人や参勤交代で江戸に住む武士から支持を得ます。

伝統的な歌壇において、芭蕉の尊敬する歌人に定家と西行がいます。とくに西行はそのころ純粋に無常感を悟って出家し、諸国を放浪した歌聖として、信仰されていました。芭蕉の『おくのほそ道』の旅が西行の五百年忌にあたることでもそれがわかります。

Ⅲ芭蕉偶像化への経緯とその変遷

芭蕉没後、当時の行き詰まった俳壇の打破を目的に、江戸中期、京都・江戸・尾張・加賀・伊勢の五ヵ所を拠点として「芭蕉に帰れ」の旗印のもと、芭蕉復興運動が起こります。その中心が京都の蕪村と蝶夢です。

蕪村は芭蕉の作風への憧憬を「三日、翁の句をとなえざれば、口むばらを生ずべし」と唱え運動を推進します。蝶夢は芭蕉顕彰運動の一環として、義仲寺を再興、絵巻『芭蕉翁絵詞伝』を奉納しました。蝶夢は芭蕉を、「道を極める人」また「旅の俳人」として描き、これが、冊子として出版されるに至り、芭蕉を偶像化する決定的な役割を果たしました。

さらに、芭蕉百回忌以後、寛政・天保期には、芭蕉は「桃青霊神」や「花の本大明神」の神号を授与され、また明治期に入っても、桃青霊神として崇められ、「大教正」と位置づけたり、「神道芭蕉派」を名乗るものが出たり、芭蕉崇拝は変わらず、ますます神格化されていきました。

Ⅳ芭蕉を支えた精神共同体

『おくのほそ道』は、元禄十五年に刊行以来、版を重ね多くの人々に読まれ続けています。その理由は、作品としての魅力だけでなく、日本人の漂泊思想の願望と重なり、漂泊の詩人としての芭蕉像が、支持されているのです。芭蕉が没した直後から、現在に至るまで『おくのほそ道』の旅の後をたどって、多くの俳人が旅をしている事がそれを証明しています。

また、蕉門十哲を始め門人達が、芭蕉の教えとして作品を伝えようと『芭蕉七部集』を選定したり、芭蕉伝書『二十五条』を刊行したことが、芭蕉の俳諧を全国に流布させ、芭蕉像を神格化、俳聖化していく上で、大きな役割を果たしました。

Ⅴ芭蕉批判

圧倒的な芭蕉崇拝の歴史の中で、その偶像化への批判は、江戸期からありました。涼袋は、「後人酔へるは、芭蕉の毒にあたれる也」と言い、秋成や国学者斎藤彦麻呂、儒者田宮仲宣も批判しています。近代になると、子規が、写生説を唱えて蕪村の再発見の裏側に芭蕉を位置づけ、具体的に「芭蕉雑談」では、〈名人芭蕉と言えども大半は悪い句〉と批評しています。

明治四十五年、沼波瓊音は雑誌『俳味』に「芭蕉に妾ありき」という論文を発表し、それまでの俳聖芭蕉に、寿貞という妾がいたことをショッキングに取り上げました。

Ⅵむすび

芭蕉の作品は、時代によって色々に読み替えられ、読み続けられています。イギリスのフランク・カーモードは『秘義の発生』において、「書かれたものはつねに読み直され、読み替えられる」と書いています。これが、古典化（カノン化）と言うことです。

また最近では、「十人十色の国語教育・文学教育」といったことが提唱されています。つまり結論は一つでなくてよい、表現の未完結性をモットーとすると、作者の考えていない世界が生まれてくるということです。このように作品が作者を離れて独立する、古典化することを、ロラン・バルトは、「作者の死」と呼んでいます。

日本では、俳句私小説論的な見方が圧倒的ですが、私は芭蕉の生涯を伝記ではなく、作品だけで描いてみたいと思っています。

※この記録は、昨年10月10日に行われた講演会の内容を要約したものです。